

接続詞の用法と文脈展開 —作文指導のための一試案—

市川保子

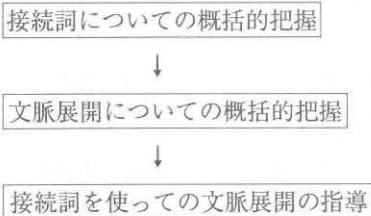
0. はじめに

日本語学習者が中級・上級へと進むに従って、一つのまとまりのある文章を作る能力が必要と
なってくる。具体的には、手紙・日記・感想文・レポート・論文などが書けるということであるが、
それらができる前段階として、4文程度のまとまりで文章を作る力を養っておかなければならない。

また、文をつなぐ接続詞の使い方においても、2文接続のときだけでなく、3、4文接続になっ
たときどのように組み合わせていくかを習得させておかないと、文脈展開が正しくできなくなる恐
れがある。文脈は内容を展開するについての話し手（書き手）の考え方を反映する。文型学習を終
えた段階の学習者にとって次に必要なことは、自分の考えに沿って文脈を展開させる力を付けるこ
とである。本小論は、初中級レベルの学習者を対象に、4文接続を中心とした、接続詞による文脈
展開習得のための一試案（以後I（chikawa）試案と呼ぶ）である。

1. 「接続詞による文脈展開」の指導の流れ

本小論における「接続詞による文脈展開」指導の流れは次のようである。



1-1 接続詞についての概括的把握

「接続詞による文脈展開」指導の第一段階として、学習者に、まず、接続詞とは何かの全体像を
つかませたい。最初に接続詞の実際的な使用の状況を、次に接続詞の構文的、機能的位置付けを概
観させる。

1-1-1 接続詞の使用の実際

何種類かの文章で接続詞が実際にどの程度使われているかを示し、学習者に次のことに気付かせ
たい。

- ① 文章の中には接続詞の多い文章、少ない文章、接続詞の全くない文章があること。
- ② 接続詞の多少は、文章の種類、書き手の意図、考え方、好みなどによること。

まず、学習者の使用している教科書ではどうか、小説、評論、新聞などではどうかを概観させる。

次の例は小説と評論の無作為な1頁を取ったものであるが、評論の方に接続詞が多く現れている。文章の選択の仕方でもっと違った形が出て来よう。一般的には、文学関係に接続詞の現れ方が少なく、論説文の方に多いこと、また、接続詞の使用率と文章の論理性との関係についても少し触れておきたい。

(1)

が、しかし、しかし、

(2)

そして、それから、すると、または、それで、しかし、

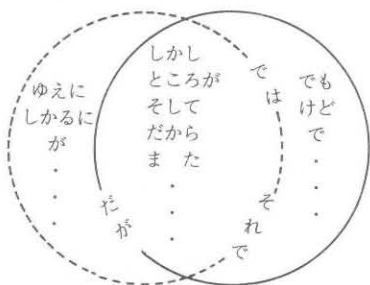
小説 (松本清張『点と線』 P 2)

評論 (土居健郎『甘えの構造』 P 2)

1-1-2 接続詞の構文的、機能的側面

1) 接続詞が話し手の意志によって選択でき、文脈の方向付けのできるものであることを学習者に知らせる。接続詞が詞でありながら詞的要素の低い、言い換えれば辞に近い、話し手の主体的意志を表す機能を持つこと、文と文がつながって文脈が形作られるが、その文脈というものは、内容を展開するについての話し手(書き手)の考え方を反映することを言及しておきたい。例えば、助詞においては「私が、私の、私を、私に…」と、話し手の意志によって助詞を選択し、文の方向を変えることができるように、接続詞も文と文の間においてそれができるとを伝えておく。

2) 助詞の中にも終助詞のように話しことばでしか使えないものがあるように、接続詞にも書きことば専用のもの、話しことば専用のもの、両用のものがあることに触れておく。



———話しことば

-----書きことば

1-2 文脈展開と接続詞

I 試案では、文脈展開の方向と量を、直線を使って明示的につかませることを基本方針とする。1文の文脈展開の方向を「たて」「よこ」とに二分し、文章が「たて」「よこ」の方向にどれだけ展開したかを量的につかませる。

ア. 1文の文脈展開の量



イ. 文脈展開の方向

{ 「たて」に伸びる
「よこ」に広がる



北条淳子氏は「中級読解教材における接続詞の問題」の中で、中級教材に現れる使用頻度の高い23個の接続詞について検討を加えておられる。ここではそれらの23個の接続詞を、市川孝、永野賢両氏の接続詞の分類に従って文脈展開の「たて・よこ」の方向に配置してみる。

(括弧内は永野氏の呼び方、それ以外は両氏共通)

た て ↓	順接 (展開)	だから, そこで, それで		
	逆接 (反対)	しかし, だが, けれども, それでも, でも, ところが		
	転換	ところで, さて, では		
	同列 (同格)	対比	補足	添加 (累加)
	つまり	あるいは	もっとも	そして
	たとえば			それから
	すなわち			それに
	要するに			また
	いわば			さらに
				しかも
			よ こ →	

(○印を付けたものは北条氏統計の23個の接続詞上位8つに、補足の「もっとも」、転換の「ところで」を加え、10個選択したものである。)

文脈展開の方向は、その「方向づけ」の両端の間に種々の重なりがあり、単純に「たて」「よこ」と二分することは適当でないかもしれない。しかし、文脈展開が多様な様相を持つものであればあるほど、指導の第一段階としては、大きく二分し、学習者に文脈展開の全体像をつかませる必要があると考えられる。そしてその後に、第二、第三の段階として、文脈展開のより細かい分類に入っていくという手順をとった方が、指導のためには有効と考えられる。

ここで、「たて」に伸びる」「よこ」に広がる」とは、次のような意味である。

「あるひとつのことがらを言いかえたり(同列)、つけ加えたり(添加)、おぎなったり(補足)、引用したり(連鎖)することは、書き手の関心とその周辺を離れたがらないことを示している。つまり論点を深化拡充しようとする意図が理解される。それに対して、順接・逆接・転換などは論点の推進発展に役立つことが多い。」

これは信州大学教育学部附属長野中学校の国語研究グループによる、読解指導の報告の一節であるが、「論点を深化拡充しようとする」文がI試案の「よこ」に広がる文」であり、「論点の推進発展に役立つことが多い」文が「たて」に伸びる文」に当たる。

例えば、

- (1) a. 有正はその会に出たくないと言っていた。
b. ところがその彼が出かけて来たのである。
- (2) a. 有正はその会に出たくないと言っていた。
b. つまり、冴子に会う勇気がないらしい。

において、(1)では、aの「会に出たくないと言った」という有正の言動にもかかわらず、有正が実際には会に参加したという事態・事柄の進展がbに存在する。一方、(2)のbは、有正の「会に出たくないと言った」という言動に対し、それは何故であるかの理由付けをしている。つまりaの事柄に止どまってそれをより掘り下げようとしている。(1)(2)において(1b)がI試案の「たて」に伸びる文」であり、(2b)が「よこ」に広がる文」に当たると言えよう。

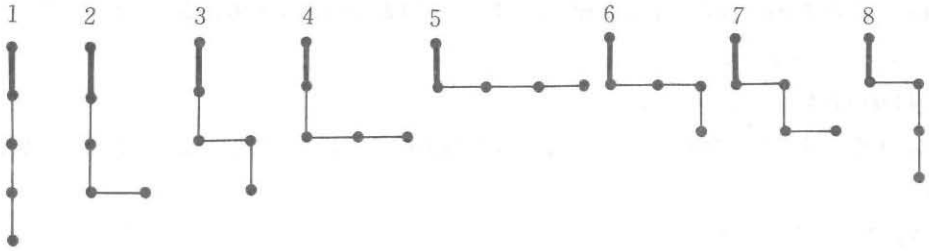
1-3 接続詞を使つての文脈展開の指導

1) 導入する接続詞の数を限定する。

理解語彙としてはもっと多く導入する必要があるが、使用語彙としての第一段階では10個の接続詞(前図で○印をつけたもの)の習熟を目標とする。

2) 最初に1文が与えられて、それに続く3文の作成を目的とする。3文はいずれも文頭に接続詞をとることとする。

一つの文があり、その文に続く次の文が「たて・よこ」二通りの方向に文脈展開をするとすれば、計4文の文章は、次の8通りの文脈展開の型のいずれかをとることになる。



(太線は最初に与える文，・印は接続詞，最初の文は「たて」方向に展開するとしておく。)

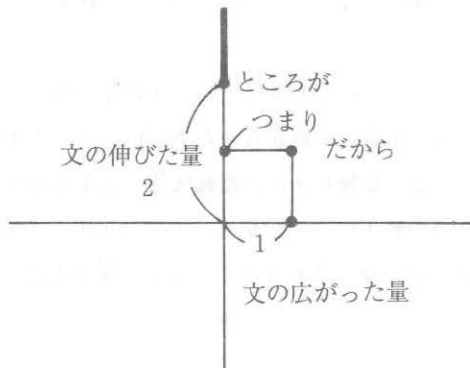
1-1で見たように、実際には全ての文が文頭に接続詞をとるわけではないが、ここでは接続詞による文脈展開の基本練習として、各文の文頭に接続詞を置いて練習する。練習前の予備知識として、10個の接続詞について「たて・よこ」の展開の仕方、各接続詞の意味(訳を与えてもよい)など、学習者には簡単な説明をしておく。「しかし」がbut, 「そして」がand 程度の説明でもよい。次は4文接続による文章の作成例である。

(例)

- 1文目：犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。
- 2文目：ところが 猫は主人の引っ越した家にはなかなかじょうとはしません。
- 3文目：つまり 犬と猫は本質的に性質が異なっているのです。
- 4文目：だから 我々は、家畜だからといって両者を同じように扱ってはいけません。

1文目は教師が与えても良いし、学習者に任意の1文を考えさせても良い。(例)では1文目を、古川晴男『生命のかがやき』の一節からとった。2文目は学習者が文脈展開の方向を自分で考え、10個の接続詞の中から展開にふさわしいものを選び、文を作る。2文目が出来れば3文目、4文目作成へと進む。学習者の文作成がむずかしいようであれば、2文止めで練習し、慣れたところで3文止め、4文止めへと進むように指導する。((例)の2~4文目は『生命のかがやき』の内容に沿って、筆者が作成したものである。)

(例)の文脈展開の方向と量は次のようになる。



従ってこの文章は、「たて」に2伸び、「よこ」に1広がった文と考えることができる。

3) 指導の実際

次に実際の練習過程を示すことにする。文脈展開パターン3（たて・よこ・たて）を例にとってみよう。

(例A)

1文目：犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。

2文目は「たて」の展開だから、「だから・しかし・ところが・ところで」の4つの接続詞から選べる。4つの選択可能性で4文全部作ったとすると、

- | | | |
|-----|---|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2文目 | { | だから 犬は人につく動物と言えるかもしれません。 |
| | | しかし 主人がいなければ、もとの家にとどまろうとします。 |
| | | ところが 猫は主人の引っ越した家にはなかなかなじもうとしません。 |
| | | ところで シロという犬の話を知っていますか。 |

この4文の中で「だから」を選んだとする。3文目は「よこ」の展開なので、「だから」文に続けて次の6通りの選択可能性があることになる。6文全部を作ってみると、

- | | | |
|-----|---|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 3文目 | { | つまり 犬と人間には信頼関係が結べる可能性があるわけです。 |
| | | たとえば シロという犬が主人を求めて引っ越し先の九州まで追いかけて行ったという話があります。 |
| | | あるいは 犬には人の匂いをかぎわける能力があると言った方がいいのかもしれませんが。 |
| | | もっとも 全ての犬がそうだというわけではありません。 |
| | | そして 飼い主にとってはそれが犬への愛情につながって行きます。 |
| | | また 犬は人を選ぶと言った方がいいのかもしれませんが。 |

3文目で「つまり」を選んだとする。4文目は「たて」の展開である。

- | | | |
|-----|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4文目 | { | だから 我々は犬を違った面から見た方がいいようです。 |
| | | しかし 犬もやはり動物だから、信頼関係には限界があります。 |
| | | ところが 先日の野犬による悲劇も一方では現実なのです。 |
| | | ところで あなたの身のまわりでこんな話を聞いたことはありませんか。 |

4文目で「ところが」を選んだとすれば、出来上がった文章は次のようになる。

「犬は主人が新しい家に引っ越したとき、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。だから犬は人につく動物と言えるかもしれません。つまり犬と人間には信頼関係が結べる可能性があるわけです。ところが先日の野犬による悲劇も一方では現実なのです。」

次に文脈展開パターン5を例にとってみよう。(パターン5は2文目以下は「よこ」展開なので、「よこ」展開の6つの接続詞、「つまり、たとえば、あるいは、もっとも、そして、また」のいずれかを使った文を2文目、3文目、4文目として示す)

(例B)

1文目：犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。

つまり

3文目：たとえば あなたがシロという犬を子犬の時から飼っていたとします。

あるいは

4文目：もっとも 子犬からでなくてもいいのです。

そして

2文目：また よその家に預けようとしても、主人が帰る時にはすぐついて帰ろうとします。

出来上がった文は次のようである。

「犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。また、よその家に預けようとしても、主人が帰る時にはすぐついて帰ろうとします。たとえば、あなたがシロという犬を子犬の時から飼っていたとします。もっとも子犬からでなくてもいいのです。」

同様のやり方で文脈展開パターン1を例にとってみよう。パターン1は2～4文とも「たて」の展開である。従って、「だから、しかし、ところが、ところで」からの選択となる。

(例C)

1文目：犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。

2文目：だから 犬は人につく動物と言えるかもしれません。

4文目：しかし それも一概に言えないかもしれません。

3文目：ところが 猫は犬と全く正反対の性質をそなえています。

ところで

出来上がった文章は次のようになる。

「犬は主人が新しい家に引っ越した時、主人がいればいっしょに新しい家に住もうとします。

だから犬は人につく動物と言えるかもしれません。ところが猫は犬とは全く正反対の性質をそなえています。しかし、それも一概には言えないかもしれません。』

2. 指導上の留意点

実際に作文させても、学習者からはなかなか適切な文が出て来ないかもしれない。原因の一つは主題の表し方がわからないこと、もう一つは文末をどのようにまとめればいいのかかわからないためであろう。I 試案の一つの利点は、接続詞の選択によって、主題の表し方及び文末表現の仕方が、他の接続詞をとった時との比較において見えてくるということである。例えば、(例)の場合、各文は次のような構造を持っている。

1 文目：犬は ----- 住もうとします。

2 文目：ところが 猫は----- なじもうとしません。

3 文目：つまり 犬と猫は----- 異なっているのです。

4 文目：だから 我々は----- いけないのです。

2, 3, 4 文目では、いずれも接続詞のあとに「名詞+は」が現れている。また、文末表現について言えば、2 文目の「ところが」の文末は、前文の「住もうとします」に対し、否定の「なじもうとしません」が来ている。また、「つまり」「だから」には「～のです」が使われている。

一方、(例A)においては、

1 文目：犬は ---- , 主人がいれば -- 新しい家に住もうとします。

2 文目：だから 犬は ---- と言えるかもしれません。

しかし (犬は) 主人がいなければ、もとの家にとどまろうとします。

ところが 猫は ----- なじもうとしません。

ところで (あなたは) ----- 知っていますか。

省略(括弧内)を補うと、各文とも接続詞のあとに「名詞+は」を持っている。また「しかし」を持つ文では前文の「主人がいれば」に対し「主人がいなければ」、「新しい家」に対し「もとの家」といずれも反対表現が来ている。「しかし」と「ところが」を比べてみると、「しかし」が前文と同じ主題「犬」で続いているのに対し、「ところが」は別の対照的な主題「猫」をとっている。

これは同例4文目の「しかし」「ところが」にも同じことが言える。

しかし 犬もやはり動物だから、信頼関係には限度があります。

ところが 先日の野犬による悲劇も一方では現実なのです。

ここでは、「しかし」は前文の「犬と人間」の一部を受けて、「犬も」で続いているのに対し、「ところが」では話の違う「野犬」のことを持ち出そうとしている。これについては(例C)の「しかし」「ところが」についても同じことが言え、

しかし それも一概に言えないかもしれません。

ところが 猫は犬と全く正反対の性質をそなえています。

において、「しかし」が前文に補足を加えているのに対し、「ところが」は「犬」から「猫」へと主題を転じようとしている。

これらのことから、「しかし」と「ところが」はともに逆接を表すものの、「ところが」の方が「しかし」より、それらに続く文の転換の度合いが大きいと言えよう。

次に(例A)の3文目を用いて横展開を見てみよう。

つまり 犬と人間には ー ー ー ー があるわけです。

たとえば ー ー ー ー という話があります。

あるいは 犬には ー ー ー ー と言った方がいいのかもしれない。

もっとも ー ー ー ー というものではありません。

そして 飼い主にとっては ー ー が ー ー ー ー つながっていきます。

また 犬は ー ー ー ー と言った方がいいのかもしれない。

主題という点では「つまり」「あるいは」「そして」「また」には、「名詞＋(助詞)＋は」が続いている。一方、「たとえば」「もっとも」にはそれがない。(省略もされていない。)

「つまり／あるいは／そして／また」のグループと「たとえば／もっとも」のグループとを比べると、前者が前文に対して対等の文を導き得るのに対し、後者は前文に対し従属する文をとるという違いがある。前文での叙述に対し、例をあげて説明を加えるのが「たとえば」であり、一部修正の但し書きを付けるのが「もっとも」である。

このように前文に依存する接続詞には、他にも、「ただし」「というのは」「なぜなら」などがある。また、「あるいは／また」をとる文では前文と同じ文末表現「～かもしれません」が来ている。同格型の接続詞であるために前文と同じ型の文が並びやすく、同一文末表現を取りやすいのであろう。

これまで見てきたことは次のようにまとめることができよう。

- ① 文頭に接続詞を持つ文では「名詞＋は(も)」が主題として現れやすい。ただし「たとえば／もっとも／ただし／というのは」などの前文依存型の接続詞をとる文はその限りではない。
- ② 逆接の接続詞は前文に対し反対の表現をとりやすい。
- ③ 「ところが」の方が「しかし」より、前文に対し転換の度合いの高い、意外性の度合いの大きい文が続きやすい。
- ④ 「つまり」「だから」は文末に「～のです／～のだ」をとりやすい。
- ⑤ 「また／あるいは」を持つ文は前文と同じ文末表現をとりやすい。

以上の①～⑤についてはもっと実証的な裏付けが必要であるが、指導のときに参考にできる事柄である。これらのことを教師の助言によって学習者が自然に気づくという形で指導していきたい。

3. I 試案の問題点

I 試案の問題点としては次のことが考えられる。

- ① 4文の作文練習において、2文目以下の各文の文頭に接続詞を持たせる意味はあるのか。
- ② 文頭にそれぞれの接続詞を持つ二文は常に連文が可能であろうか。接続詞同士、続きにくい組み合わせ、続かない組み合わせがないだろうか。
- ③ 接続関係を「たて・よこ」の二分類で片付けてしまっていないか。

①については、接続詞を使っての4文接続作成ができるようになった段階で、発展段階として接続詞の省略についての指導をする必要があるだろう。本小論では接続詞の省略について考える余裕はないが、どの接続詞が省略でき、どの接続詞ができないか、接続詞を省略したためにどの文構成要素にどういう修正を加えなければならないか、どのような4文の組み合わせが一番自然であるかなど、学習者と教師がいっしょに考えながら授業を進めて行く必要があるだろう。

②については今後の調査・研究に待たねばならないが、頻度数の高い接続詞の組み合わせと、そうでない組み合わせがあるだろうと考えられる。

- | | |
|---|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| { | ～はその数字が象形文字であることである。 |
| | たとえば 万をあらわす数字は指であり、
また 千をあらわす数字は蓮をかたどったものといわれる。 |
| { | ～ すべてギリシャ数詞の頭文字からとったものであって、 |
| | たとえば XはXIAIOI (1000)の頭文字、ΓはΠENTE (5)の古い形である。
また Γとあるのは以上の二つを組み合わせせて五千をあらわす趣向にはかならない。 |

この2例は、吉田洋一『零の発見』（岩波新書）の一節であるが、ここでは「たとえば／また」の組み合わせがいくつか見られる。列挙ということを考えれば、「また／また」、「また／あるいは」も組み合わせやすいはずである。一方、要約の意味を持つ「つまり」のあとに例示を表す「たとえば」は来にくいであろう。また、同じ接続詞同士の重なるの可能性にも限界があることも考えられる。「だから／だから」、「たとえば／たとえば」など、無理な組み合わせが出て来そうである。

③については、「たて」「よこ」に加えて「ななめ」の文脈展開も考えられるかもしれない。補足の「もっとも」、逆接の「しかし」の補足用法*などは、「たて」の展開に一括せずに「ななめ」の方向としてとらえることも出来よう。今回は、1-2「文脈展開と接続詞」のところで述べたように、指導上の簡素化と効率化を優先させ、「たて」「よこ」2方向でのみ検討したが、改善の余地のある点である。

(注) * 「しかし」の補足用法については参考文献6に考察がある。

参考文献

1. 北条淳子 1980 「中級読解教材における接続詞の問題」『講座日本語教育16』
2. 市川 孝 1978 『文章論概説』教育出版
3. 永野 賢 1972 『文章論詳説』朝倉書店
4. 信州大学教育学部付属長野中学校国語研究グループ『昭和40年度中学校教育研究会要項』
5. 森岡健二 1973 「文章展開と接続詞・感動詞」『品詞別日本文法講座』明治書院
6. 岩澤治美 1985 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育56号』日本語教育学会